

朝鮮・日本における初期金属器文化の系譜と展開

— 銅矛を中心として —

近 藤 喬 一

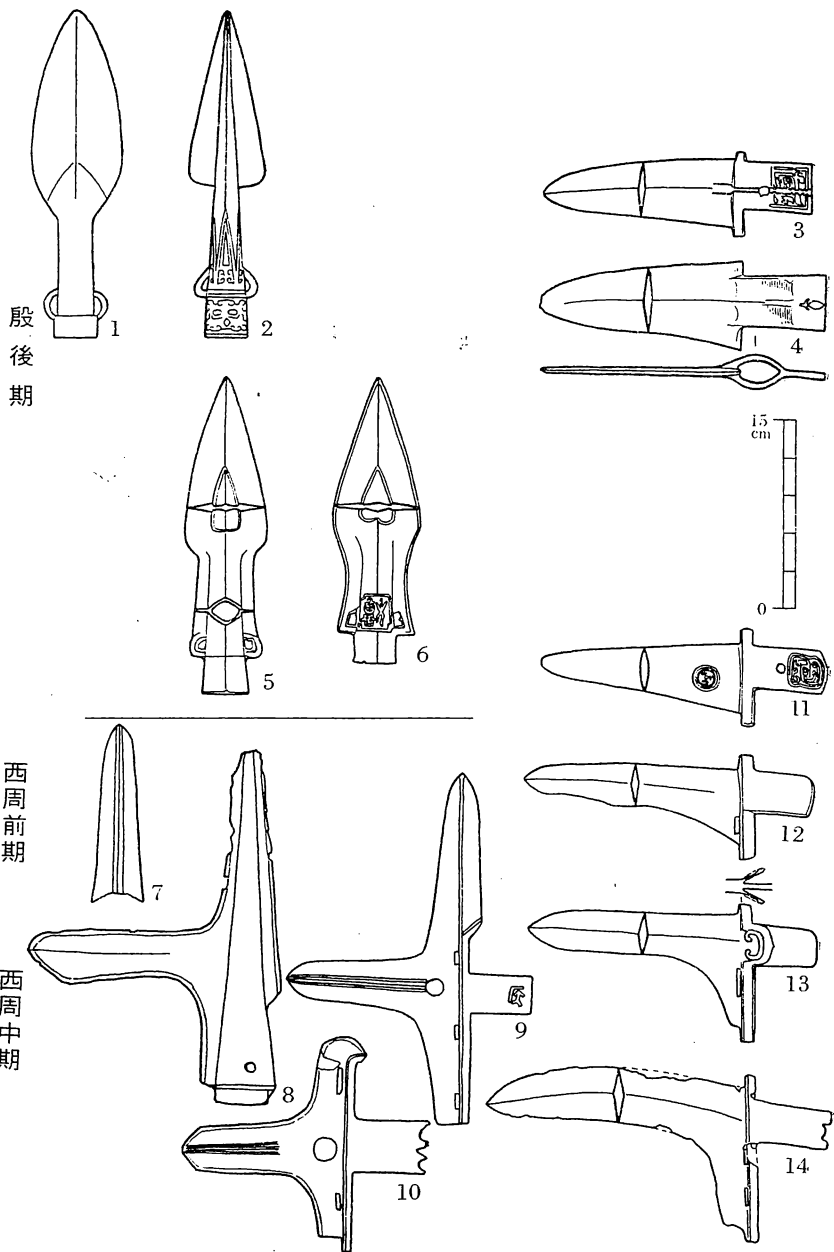
【要約】弥生文化の所産である青銅器の系譜を追求するため、本論では銅矛をとりあげた。中国では殷後期に、鎡に兩耳をもつ銅矛が出現する。しかし西周以降、中原および河北では無耳有穿の銅矛および戟の刺部が主流をしめている。一方春秋末以後、湖南を中心とする江南地域では鎡部に鼻あるいは環耳をもつ矛があらわれ、戟は形づくらず特有の変化をしめす。河北の戦国時代青銅器文化の影響をうけて銅利器の鑄造を開始した北鮮では、いぜん実用の武器として銅矛は使用されていた。しかし南鮮では儀器化のきざしが見える。弥生前期末近くに始まる日本の青銅利器は、慶州を中心とする朝鮮南部のものを舶載し、以後南朝鮮の工人の手によって、日本の青銅利器の鑄造が開始される。そして鑄造という利点を十二分に活用することなく一方向的な変化を示すものをつくりつけ、弥生時代の社会の規制力をうかがわせる。

史林 五二巻一号 一九六九年一月

はじめに

弥生文化の成立に関して、稲作農耕、土器、青銅器、鉄器、磨製石器等の系譜の問題がある。本論では青銅利器——とくに銅矛——をとりあげ、弥生文化の系譜の一端を追求することを目的とした。稲作農耕に関しては、山東半島を経て西南鮮に伝えられ、さらに日本へ流入した可能性の高い

ことがすでに指摘されている。磨製石器については、浙江・江蘇地方と南朝鮮・北九州とが形態的に関連のあることがある程度明らかにされつつある。土器・鉄器に関しては、いまだ明確な解答がなされていないのが現状であろう。青銅器について結論からいえば、弥生文化の青銅利器の祖形は慶州を中心とする朝鮮半島南部に求められる。しかも国産銅器鑄造の開始にあたって活躍したのは、南朝鮮の工人



第一図 殷・西周の銅矛・銅戈・銅戟

（第一図説明）

- | | | | |
|---|------------|----|------------|
| 1 | 小屯横一三丙区 | 8 | 濬県辛村二号墓 |
| 2 | 小屯E一六丙坑 | 9 | 濬県辛村二号墓 |
| 3 | 侯家庄一〇〇一号大墓 | 10 | 濬県辛村二号墓 |
| 4 | 侯家庄一〇〇一号大墓 | 11 | 濬県辛村八号墓 |
| 5 | 藤井有隣館藏品 | 12 | 濬県辛村六〇号墓 |
| 6 | 東京国立博物館藏品 | 13 | 長安張家坡二一八号墓 |
| 7 | 長安張家坡二二〇号墓 | 14 | 濬県辛村四二二号墓 |

達であったと推定する。では文化複合としての弥生文化の成立は如何に理解すべきものであろうか。その点に關してはなお今後の検討を待ちたい。

朝鮮・日本の青銅利器の系譜を明らかにし、そこにおける意義の類似あるいは相違を知るため、最初に中国の青銅利器の展開を銅矛を軸として検討しておく。また銅矛の分類の基準としては耳の有無等、着柄法を重視した。

一 中国の銅矛を中心として

銅矛を殷・西周・春秋・戦国・兩漢の各式にわけ地域差についても考慮した。資料は大部分、解放後の発掘により出土したものに限った。

(1) 殷式銅矛 I・II・IIIの三型式に分類しうる。I式は中国で最も早く出現した銅矛で、形からいえば銎の部分

が脊となり鋒までとおっており、銎の基部両側に環耳がつけられているものである。小屯E一六丙坑出土矛^①（第一図2）と侯家庄一〇〇一号大墓出土矛は、銎部に鑿殺紋が表出されており、形からみると小屯横一三丙区出土矛^②（第一図1）より後出のものかと考えられるが、最も古い一群に属する。侯家庄一〇〇一号大墓では無胡直内および有銎式銅戈と伴出している（第一図3・4）。

II式はI式よりの変化型式で、刃部が銎部の方へのび両耳に達している。しかし両耳はいぜん環状の形をとどめている。解放後の発掘資料中には、これまでのところ見うけぬが、京都の藤井有隣館所藏品中等に見うけられる（第一図5）。III式銅矛は、II式のものより、さらに型式変化を示している。両耳はもはや環状の形をとどめず、銎部に接したひれ状の部分に双孔があげられているだけである（第一図6）。この類の矛は、甲骨文の人名と対応する図象記号の亜醜銘を銎部基部に鑄出するものが多数を占め、特定集団と武器の形式とに關連があるかどうかという問題を含んでいる。河南省安陽大司空村の殷墓^③では、中胡二穿の銅戈等が出土する墓と併存しており、I式より型式的にも時期

的にも後出のものであることが明らかである。

以上、殷式と認められる三型式の銅矛は、大多数が河南省殷墟より出土し、わずかに鄭州^⑥とか輝県での出土例が知られるにすぎない。さらに遠く湖北省^⑦よりの出土が報告されているが殷文化と南方の關係は主題からはずれるので省略する。これまで成分分析された資料によると、ほとんど錫分を含まず純銅^⑧に近いことが注目される。

(2) 西周式銅矛 陝西省長安張家坡二〇四号墓^⑨では、殷式銅矛Ⅰ式に類似する矛が、明器かと推定される直内無胡の銅戈と共伴している。土器形式より西周初年(成王あるいは康王代)に比定されている。矛の全長は二五・二釐で殷式銅矛とかわらず、ただ身部が銚部の二倍近くの長さになっていることが異なっている。同じ張家坡の二二〇号墓では、銚部を欠損しているが、脊が鋒部までとおり両刃の末端がするどく三角形にとがった矛が出土している(第一図7)。

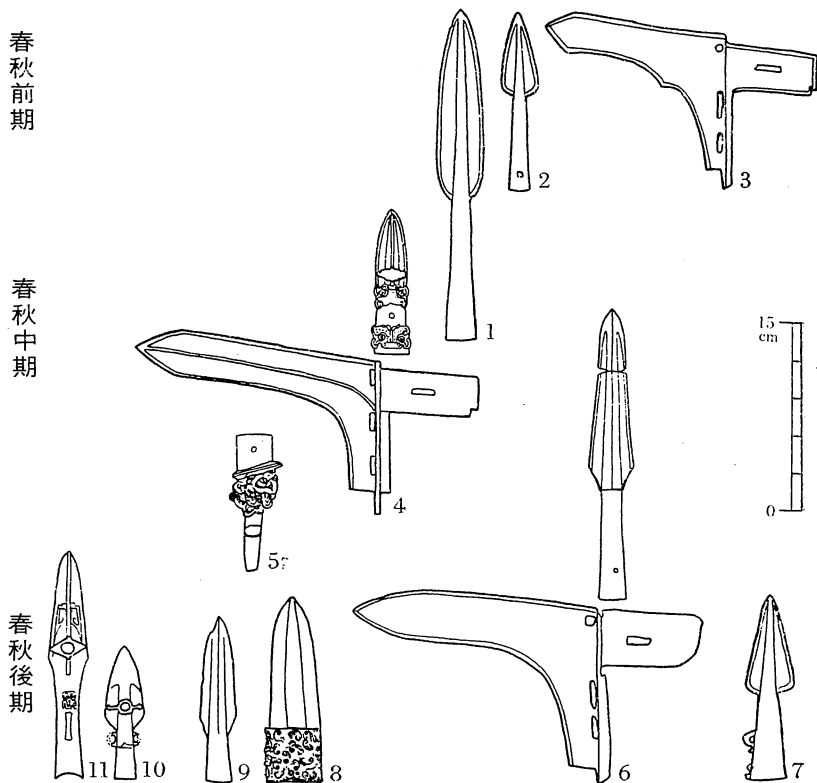
この類の矛は殷式の矛には見あたらない。盗掘をうけていたため土器の形式がわからず、西周代のいつごろのものは不明である。

一方、河南省濬県辛村四八号・一八号の両墓から、実用

の矛が出土したと報告されている。記述のみから推測すれば、四八号墓出土矛は殷式銅矛のように身部の幅が広くなく、また両環耳もなく、むしろ後にのべる春秋式銅矛の先駆型式かとおもわれる。

矛いがいに辛村では、二号・八号・二九号・四二号の各墓より三種類の銅戟が出土している。戟Aは銅矛を主体として、矛の身部中央片側に、戈の援状の刃部をつけたものである(第一図8)。矛の銚部には耳がなく目釘孔がある。

二号墓で直内無胡の銅戈と伴出している。戟Bは二穿の戈に扁平な矛形の身部をつけ、戈の上蘭にあたるところに一穿をあけたもの(第一図9)。二号・八号墓で出土しており、八号墓では短胡一穿の戈と共伴している。戟Cはふつう鉤とよばれているもので二穿の戈の上部に、片刃の扁平な刃部をつけ、蘭部に二穿をあけたものである(第一図10)。四二号墓では、直内無胡から中胡二穿までの各型式の銅戈と共存している(第一図11-14)。種々の戟の試作段階と考えられる。辛村墓は、西周時代より東周初年にわたる衛国の貴族達の墓に比定されており、二号・八号・四二号墓は西周中期(孝・夷・厲・宣王代)とされている。それに対し矛



第二図 春秋の銅矛および銅戟

- | | | |
|-----------------|---------------|---------------|
| 1 上村嶺虢国1747号墓 | 2 上村嶺虢国1052号墓 | 3 上村嶺虢国1715号墓 |
| 4,5 山西侯馬上馬村13号墓 | 6 江蘇六合程橋鎮 | 7 河北唐山雲神廟 |
| 8,9 安徽寿縣蔡侯墓 | 10,11 湖南寧鄉 | |

の出土した十八号墓は西周早期（成・康・昭・穆王代）に比定され、四八号墓の年代は出土地域より早期墓と判定されている。

(3) 春秋式銅矛 西周晚期より

春秋前期（紀元前九世紀初頭—紀元前五五五年）の資料として、河南省三門峽市上村嶺の虢国墓地の矛がある。九基の墓より十五本出土した矛は、身部の幅が狭くて、全長の長いものと（第二図1）、幅が広く短いもの（第二図2）の二類型に区別しうるが、ともに無耳で目釘孔を鑿部にもつことは共通している。形式的には、辛村四八号墓出土の西周式銅矛につながる可能性が大きい。盗掘されていない一〇五二号・一七一一号・一八一〇号の各墓のいずれにおいても、矛

と戈は共伴しているが、出土状態よりみて戟を形づくっていたとは言えない。伴出している銅戈は大多数が中胡三穿の類（第三図3）である。とくに一〇五二号墓出土の戈の内上には、「號大子元徒戈」の銘があつて、墓葬の性格、年代を知る手がかりを提供している。また河南省鄭鼎大僕郷の春秋墓よりは、多数の銅器群が出土し、その中に無耳の銅矛が出土している。おそらく號国墓地出土矛に類似のもので戈と組み合せて戟を形づくってたと推定される。

次に山西省侯馬鎮上馬村の一三号墓^⑭出土の矛は、全長一・六浬で蓋部に饕餮紋類似の獸面を飾り、両穿を有している。脊の断面はこれまでの矛とは異なり、一段凸出した鎬部をつくりだしている。出土状態より中胡三穿の銅戈と組み合せて戟を形づくっていたことがわかる（第二図4・5）。この墓より出土した庚兒鼎は、徐王庚が世子の時に作つたものであり、徐国が紀元前五一二年に呉国に亡ぼされた後、会盟の際呉国より晋国に賂られ、そのご晋国の大夫タラスの人の墓に副葬されたと推測されている^⑮。墓の年代は、春秋中葉以降、春秋晩期の間かとおもわれる。

同じく春秋晩期あるいは戦国早期かと時期の判定に関し

ては種々論議されている安徽省寿县蔡侯墓^⑯からは、二つの型式の矛が出土している。Ⅰ式（第二図9）は全長一三浬で、これまでの矛と同じく双刃であるが、Ⅱ式は三稜式で、蓋部は八方形を呈し、蓋上に蟠虺紋を鑄出している。蓋部に穿はない（第二図8）。Ⅱ式とほとんど同じものが淮南市蔡家崗趙家孤堆二号墓^⑰でも出土しており、寿县一帯での特有な銅矛と考えられる。さらに注意すべきことは同じ趙家孤堆一号墓より一一本同出している矛である。全長は二二・二四浬で、脊上には凸出した三稜があり、蓋口は内湾し、刃部と直交する蓋上に一對の円穿がある。円穿に接して上部には獸首の飾りがつけられている。これまでのべてきた矛と異なった型を示すこの類の矛は、後に戦国式銅矛の際にのべる湖南・湖北に特有のもので楚の国特有のものと推定する。蔡国と楚の關係を示すものが銅容器のみならず、銅利器にもおよんでいる点興味ぶかい。

さて、蔡侯墓出土の矛は出土状態から判定して戟は形づくっていなかったといえる。Ⅰ式矛は三〇浬へだたつて円鏃と同出しており秘の全長があまり長大でなかったことがうかがえよう。

呉国の本拠地であった江蘇省では、六合県程橋鎮^①の春秋末期と推定されている墓より、矛と戈を組み合わせた戟が出土している（第二図6）。矛は全長二四・六釐で、脊上に凸出した稜をつくりだし、鏃部に穿を有する。出土状態から、戟の秘長は二・七米で、蔡侯墓出土の矛とは全く異なっている。

春秋期に比定されている湖南省常德徳山鎮四号墓^②では、趙家孤堆二号墓出土例^③が、鏃部に耳をもたず有穿であったのに対し、刃部併行の鏃部片側に環耳をもっている。この地での特異な変化型式である。

(4) 戦国式銅矛 戦国期になると春秋での武器の発展をうけつぎ、さらに各地域での展開がみられる。河南・山西・湖南・四川・河北の地域による差をもとに分類しうる。

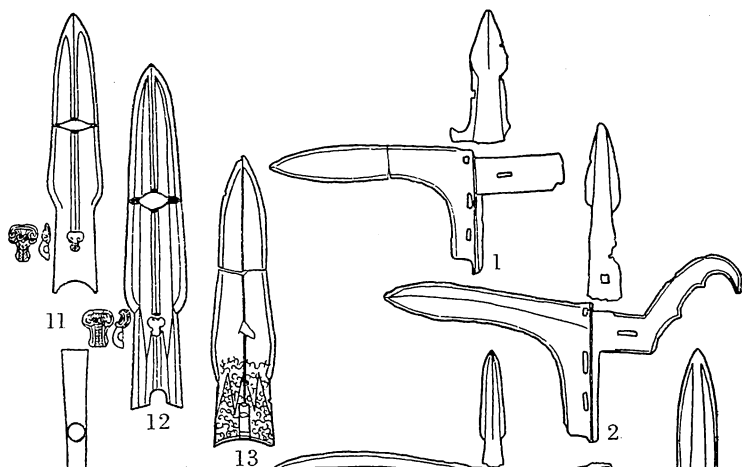
◇河南 洛陽中州路二七一七号墓^④では、戈・矛組み合わせの戟が三例出土している。戟Aの矛は、長さ一二釐で鏃が脊上に突出し、鏃の末端の鏃部両面に穿があげられている。戟Bの矛の長さは、一〇・八釐で、Aの矛とは異なり鏃上に穿をうがたない。そのかわり鏃部両側のひれ状の部分^⑤が、末端で、逆にかえり状を呈し着柄に便利な工夫が

こころみられている（第三図1）。同様な戟は輝県趙固鎮一号墓^⑥でも出土している。ただ中州路戟Bの戈が中胡三穿であるのに対し、長胡四穿であり、内は斜刃を呈している点異なる。

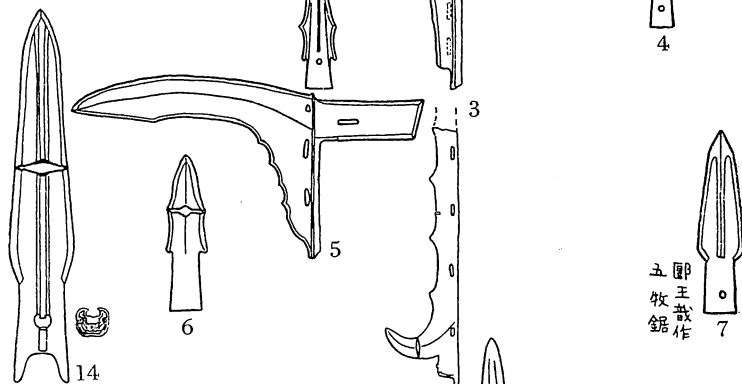
戟Cの矛は、Aの刺部より身部の長さ^⑦にちがいはあるが、鏃部は無耳両穿をもつ点同じである。戈部は内の先端が鉤状を呈し、鶏鳴戟ともよばれる最も発達した一群に属する（第三図2）。二七一七号墓は戦国早期に比定されているが、時期の下る可能性もある。

汲冢山彪鎮一号墓^⑧は時期に関して論議のわかれるものであるが戦国早—中期に比定しておきたい。ここでは矛が二本、戟が四本、戈が五本出土している。矛は二型式にわけうるが、ともに穿を鏃部にもつことは共通している。しかも一方の矛の鏃内には木の釘が残っていた。四組の戟のうち代表的な一例は、矛の全長一〇・一釐で鏃部側面に穿があり、竹釘が残存していた。戈は長胡四穿式で内は斜刃を呈している。さらに戟の秘末端につけた銅觚が出土^⑨して、全体に中州路戟AかCの発展を示すもの^⑩と考える（第三図3）。

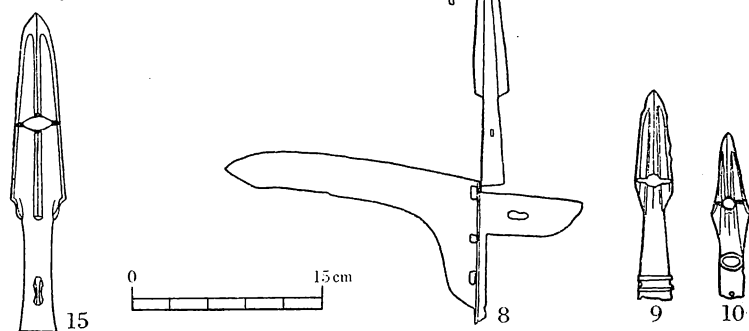
戦国前期



戦国中期



戦国後期



0 15cm

第三図 戦国の銅矛および銅戟

耳は、殷式銅矛の耳とはつく位置の異なっていること、鎔末が内灣することなどが大きな特色である。東京国立博物館蔵品の出土地不明の一例は、湖南型C型式に属し（片耳ではあるが）耳部より垂下した布紐が附着している。湖南型の耳や鼻の穿はかざりの紐をつけたもので、直接着柄に資したものでない可能性が大きく、他の地域で春秋以後盛行した目釘孔のみをもつ矛、あるいは戟の刺部とは相当なちがいがあのではないかと考える。

各型式の時期的な発展を正確に知るには、細かく検討しなければならないが、ここでは大づかみに流れをとらえておきたい。あるいは春秋晩期ごろのA型式から発展して、戦国早・中期にB・Cの各型式が盛え、戦国晩期より漢にかけてはC型式がおこなわれていた。そのいずれかの間に亜型式としてのD型式が生みだされたものと推測しておきたい。成分分析の資料によれば、C型式の矛は一六%の錫分を含んでおり、鎔部の突出していること等とともに武器としての有効度の高かったことがうかがわれる。

同出している鍬や鐮との間隔より矛の秘長は、一・八一・五米で、先に山彪鎮一号墓の水陸交戦紋鑑より推測し

た二・一米前後の最長のものであったことがわかる。識字嶺の各墓では、戈・矛・劍は常に出し、さらに弓・鏃を加えて成套の兵器を形づくっているが、矛は矛としてのみで、戟は形づくらない。楚国の兵制を種々な点で示しているといえよう。

◇四川 四川省ではさらに異なった型式の矛があらわれる。巴県冬笋壩^⑦の五三号、五八号墓、昭化宝輪院^⑧の各戦国墓では、殷式銅矛の流れをくむ両耳をもつ矛が出土している。また冬笋壩の収集品とか成都羊子山一七二号墓出土矛は、湖南AあるいはD型式に類似の矛も見うけられる。銅劍の形にみうけるように湖南からの影響が相当つよい。

◇河北 唐山市電神廟附近より片麻岩製の矛・刀子・斧の範が出土している。矛の鎔部に片耳をつくりだしたもの（第二図7）と、鎔部両側に多数の環耳をつくりだした二型式がある。時期は不明であるが春秋・戦国の間か。唐山市賈各莊戦国墓では二組の戟が出土し、刺部は中州路などの河南型と類似している（第三図8）。さらに易県燕下都城址より出土した矛は、鄆王釁あるいは鄆王喜の銘をもち注目すべきものである（第三図7）。解放前出土の資料に

よると王戣の矛は、湖南型と同じく鎬部が凸出したものであるが、鼻と耳はなく穿をもつこと、銚末が内湾しないという差がみられる。

(5) 漢式銅・鉄矛 洛陽燒溝一一五号墓^③では、身部断面扁六稜形を呈する銅矛が一例のみ出土している。二六〇基の漢墓中銅矛の出土はこの一例だけであるのに対し、鉄矛は五例・鉄刀は一一六例・鉄剣は三三例と、武器の銅製から鉄製への移りかわりを如実に示している。この変化は中州路・琉璃閣の漢墓でも同じであり春秋晩期以降、中原とは異なった銅利器の盛行した長沙においても同じであった。

一方、春秋いご発達した戈・矛組み合せの戟に対し、戈・矛一鑄の銅戟・鉄戟が漢代いご各地で使用されている。特に、河北省定県北莊漢墓^④では、光武帝の建武三二年の銘をもつ弩機および特異な鐔をもつ銅矛（伝黃州附近出土一括遺物中に類品あり）とともに銅戟が出土している。

以上、殷いらい漢にわたる中国の銅利器のあり方を銅矛を軸としつつ検討してきた。広大な中国の、長い年月にわたる武器の変遷を十分に意をつくして説明することは、現

段階では不可能であろうが、先述した資料にもとづき、およその動向をつかんでおきたい。

殷代後期、石器よりの発展とはかなり差のある完成した形で出現した銅矛は、殷虚を中心に出土する。しかも銚部の両側に環耳をもつ矛は、いごの中国の銅矛あるいは戟の刺部にはほとんど名残りをとどめていない。一方西周代になると、張家坡二〇四号墓より出土した殷式銅矛とか、戟Cの陝西^⑤と河南での出土、さらには張家坡二一八号墓と辛村四二号墓での蘭部に突起をもつ特異な戈の出土の如く、一転して河南と陝西兩地域の密接な関係が認められる。銅容器における殷周式の如く、克殷後の周王朝は、殷人の技術者をうけいれ、あるいは技術をうけついで例証ともなし得ようか。

西周期の新形式の矛は、辛村四八号墓出土矛に知られるように銚部に耳をもたぬものであった。しかも矛の成分は錫分が極めて多いと報告されており、殷代の銅矛との差が型式だけでなかったことを示している。その差は矛のみに限らない。西周中期より試作されだした戟とか鈎は、矛と戈を一鑄してより有効な武器をつくりだそうとする動きを

示すものであった。また銅戈は殷代と異なり、胡を長くして着柄に便利にし、戦闘の際の有効度を高める工夫が西周早期より試みられてきたこと。さらに先にのべた矛の錫分の多量な―おそらくは意識的な―添加とともに兵器製作上の一つの転開をもたらすものといえよう。そのことは矛の器形の上にもあらわれている。殷の矛が両耳をもち、重英をつけた儀仗的なものかと考えられる可能性があるのに対し、西周期の無耳有穿の矛は、むだなものはぶぎ、実際に有効なものを生みだそうとする一連の動きに関係するものといえよう。

春秋期の特徴は、晋・蔡・楚・呉・虢といった風に各地域で特有の武器がつくられることである。矛あるいは戟の刺部は、全般を通じて西周代に生みだされた無耳有穿の系統をうけついでいる。しかも西周代の矛・戈合鑄の戟が、実際の戦闘の際にもろさを呈したのか、あるいは西周以前の銅容器の通体合鑄方式が、春秋以後分鑄式にとってかわられたことと対応してか、戈・矛別々のものを組み合せて戟を形づくるという、より一段と有効度を高める配慮がなされている点注目すべきである。

戦国期になると、矛の比重は軽くなり戟の盛行が目立つ。しかも戟の戈部に特に重点がおかれ、内に刃部をつくりだしたり、中州路戟Cのごとく内端を鶏のしっぽ状の鈎に変化したり、中州路・山彪鎮一号墓例の如く柲下端に鈎をつけ、さらには、戈・矛の柲末端に鐔・鏃がたいていの場合につけられる等、青銅武器としての効力は最高に發揮されている。また水陸交戦紋鑑より推定しうるように、矛・戈・戟は各々三―四通りの柲の長さがあり、戦闘の場合に応じて、あるいは兵士の役割の相違によって使用されたといえよう。

一方、銅・錫の産地を豊かにもつ湖南地域では楚国の支配下のもとに中原各地とは異なった様相を呈していた。刃部直交の鏃部に鼻とか耳をもつ矛は、趙家孤堆一号墓にみられるように蔡国にもたらされ、浙江では越王の石矛としてあらわれ、四川にもおよんでいる。戟はなく、戈・矛・劍・弓・鏃が成套の兵器を構成し、しかも矛は全長二米前後の長兵であった。わずかではあるが鉄鏃の出土も知られる。それに対し車馬具の副葬は全般的に少く、矛の長兵と考え、中原とは戦闘方式に差があったものであろうか。

秦代の武器は、これまでのところあまり明らかでない。

ただ相邦呂不韋の銘をもつものとか、上郡^⑤という地名を刻した銅兵器によって知られるにすぎない。朝鮮の平安南北道で出土している戈は内末が刃部となった戦国期の長胡三穿一四穿の戈とかわらないが、ただ内が斜めにあがらず援部と平行している点の相違ぐらいである。従って秦代のものがあつたとしても区別がつきにくい。さらに決定的なことは始皇帝により、全国各地の銅器―主として銅兵器であろうが―を集めて、鐘鐻金人十二を鑄たことによる青銅兵器の消滅である。しかも時勢はすでに次の漢以後に顕著なように、鉄兵器の使用へと大きく転開してゆきつゝあつた。殷いご漢におよぶ中国の兵器の製作は常に戦闘の際の有効度を高めることを眼目に、器形・成分・セツトに関して極力努力がはらわれてきたことが明らかになったこととおもう。

ではそのような中国の流れに対し、中国の影響のもとに青銅武器の製作を開始した朝鮮、日本ではどのような展開がみられるか。朝鮮から検討してみたい。

遺物あるいは墓葬の年代について明確に年代づけることは銅兵器から

だけでは困難であるが、殷・西周の年代に関しては陳夢家説をよりどころとした。西周は紀元前一〇二五―七七〇年、春秋は紀元前七七〇―四五〇年頃、戦国は紀元前四五〇―二二二年を一応の目安にした。また第一―三図は河南を軸として、左に山西・湖南、右に河北・朝鮮といったふうに配してある。

- ① 李濟「記小屯出土之青銅器」《中国考古学報》第四冊（一九四九年）。
 - ② 董作賓・石璋如・高去尋『侯家庄』第二本（一九六二年）。
 - ③ 李濟前掲論文。
 - ④ 岡崎敬「鉞と矛について」《東方学報》第二十三冊（一九五三年）。
 - ⑤ 趙世綱・趙青云等「一九五八年春河南安陽市大司空村殷代墓葬發掘簡報」《考古通訊》一九五八一〇。
 - ⑥ 梅原末治「支那銅利器的成分に関する考古学的考察」《東亜考古学論攷》第一冊所収（一九四四年）。
 - ⑦ 郭德維・陳賢一「湖北黄陂盤龍城商代遺址和墓葬」《考古》一九六四（一八）。
 - ⑧ 梅原末治前掲論文等。
 - ⑨ 中国科学院考古研究所『禮西堯掘報告』一九六二年。
 - ⑩ 郭宝鈞『潞縣辛村』一九六四年。
 - ⑪ 中国科学院考古研究所『上村嶺魏國墓地』一九五九年。
 - ⑫ 『全国基本建設工程出土文物展覽圖錄』一九五五年。
 - ⑬ 王克林「山西侯馬上馬村東周墓葬」《考古》一九六三（一五）。
 - ⑭ 張鎮・張万鍾「庚兒鼎解」《考古》一九六三（一五）。
 - ⑮ 中国科学院考古研究所『壽縣蔡侯墓出土遺物』一九五六年。
- 郭沫若は蔡侯声（紀元前四五七年頃の墓）、陳夢家は蔡侯昭（紀元前四九一年頃の墓）あるいは成、孫自朋は蔡侯昭、唐蘭は蔡侯成（紀元前四八二年頃の墓）に各々被葬者を比定している。

- ①⑥ 馬道閣 安徽淮南市蔡家崗趙家孤堆戰國墓(『考古』一九六三—四)。
- ①⑦ 汪遂國等「江蘇六合程橋東周墓」(『考古』一九六五—三)。
- ①⑧ 楊樺「湖南常德德山楚墓發掘報告」(『考古』一九六三—九)。
- ①⑨ 中国科学院考古研究所「洛陽中州路」一九五九年。
- ②① 中国科学院考古研究所「潁川縣發掘報告」一九五六年。
- ②② 郭玉鈞「山彪鎮與琉璃閣」一九五九年。
- 山彪鎮一號墓の年代に關し發掘した郭玉鈞は墓の年代を紀元前三〇〇—二四〇年に比定しているが、高明「略論汲冢山彪鎮一號墓的年代」(『考古』一九六二—四)とか林壽晉「東周式銅劍初論」(『考古學報』一九六二—二)らは戰國初期あるいは早期に比定している。
- ②③ 「五省出土重要文物展覽圖錄」一九五八年。
- ②④ 辺成修等「山西長治分水嶺戰國墓第二次發掘」(『考古』一九六四—三)。
- ②⑤ 中国科学院考古研究所「長沙發掘報告」一九五七年。
- ②⑥ 周世榮「湖南省博物館新發見的幾件銅器」(『文物』一九六六—四)。
- ②⑦ 王家祐等「四川巴縣冬笋壩戰國和漢墓清理簡報」(『考古通訊』一九五八—一)。
- ②⑧ 「全國基本建設工程中出土文物展覽圖錄」一九五五年。
- ②⑨ 四川省文物管理委員會「成都羊子山第一七二號墓發掘報告」(『考古學報』一九五六—四)。
- ③① 安志敏「唐山石棺墓及其相關的遺物」(『考古學報』第七冊 一九五四年)。
- ③② 安志敏「河北省唐山市賈各莊發掘報告」(『考古學報』第六冊 一九五三年)。
- ③③ 黃景略「燕下都城址調查報告」(『考古』一九六二—二)。
- ③④ 中国科学院考古研究所「洛陽燒溝漢墓」一九五九年。
- ③⑤ 敖承隆「河北定興北庄漢墓發掘報告」(『考古學報』一九六四—二)。

- ③⑥ 蘇秉琦「斗雞台溝東區墓葬」一九四八年。
- ③⑦ 作銘「最近長沙出土呂不韋戈的銘文」(『考古』一九五九—九)。
- ③⑧ 孫實文「金文札記三則」(『考古』一九六三—一〇)等。

二 朝鮮の銅矛をめぐって

銅矛の着柄法を型式分類の基準とする。すなわち、鏃部の耳の有無、耳のあるものでは鏃部基部の節帯と耳の位置との關係に重点を置いた。これまで弥生時代の銅矛の型式分類の基準とされてきた、鋒と関との幅の關係では、朝鮮出土の銅矛は、すべて狭鋒銅矛の範疇に入り、その中で差が示しにくく、系統を明らかにする際には難点があると考えたからである。その結果、朝鮮出土の狭鋒銅矛をaからeの五型式にわけた。

(1) 狭鋒銅矛a型式 鏃部に耳はなく、目釘孔が鏃部側面に一個、あるいは対応する両側に一対あけられている。

鏃部下端には、二条の節帯を鑄出するものと、幅広一条の節帯を鑄出するものとにわけうる。そして二条の節帯をもつものは身部は幅の狭いものが大多数をしめ、一条の節帯をもつもの(平壤府附近・忠清南道屯浦里出土矛)には身部の幅が広いものがあらわれる。平安南道大同江面將進里出

土矛^①は、二条の節帯を鑄出したものと推定されるが、節帯上辺に細い紐をまいた痕がかなり明瞭に残っていたということである。a 型式の矛は、目釘で柄にとめた上、さらに節帯部に紐をまきつけて着柄したのかも知れない。

伝平壤府石叡里出土矛（第四図1）は、秦廿五年の刻銘をもつ銅戈と伴出したといわれる。他に平壤特別市夫租蔵君墓、平安南道美林里、平安南道大同江面（旧諸岡荣治氏蔵）、咸鏡市梨花洞、黄海北道葛峴里、黄海北道黒橋里、忠清南道屯浦里（第四図2）、慶尙北道九政里、伝慶尙北道尚州出土矛（第四図3）等がこの型式中に含まれる。^⑥

ほぼ朝鮮全体にわたって広く分布しているが、密度は平壤附近に最も高く、弥生時代に日本と最も関連の深かったかとおもわれる慶尙北道での出土数が、少ないことが注意される。

a 型式のうち、伝平壤石叡里出土矛のように、鎬が身部の全面に及んでいるものと、例えば葛峴里出土矛のように、鎬は関部までで止っているものとがみられる。しかも矛の全長は、前者よりも後者の方が長いということは、注意すべきことである。

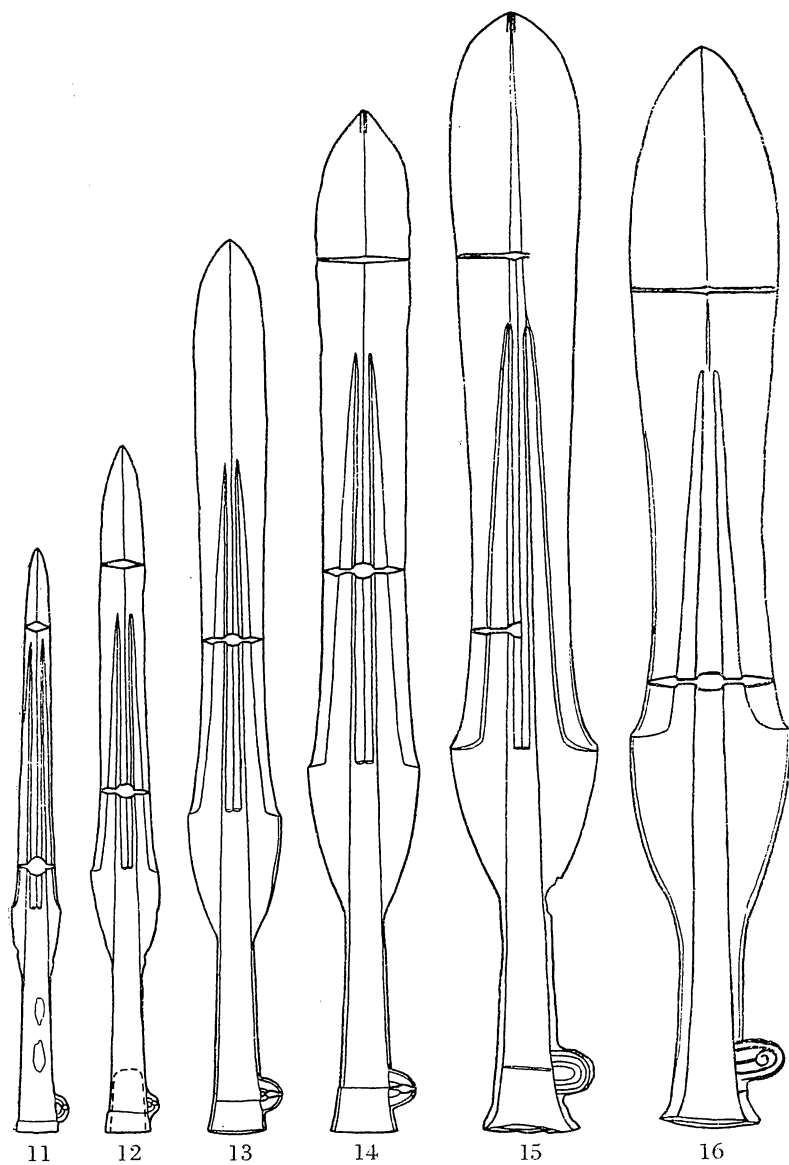
（2） 狭鋒銅矛b型式 釜の片側に菱環耳がついている。

釜下端には、二条ないし四条の節帯を鑄出している。

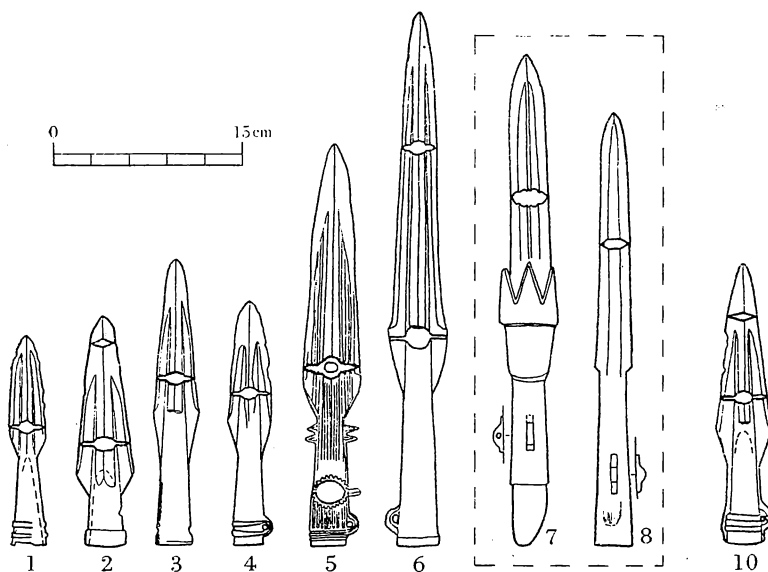
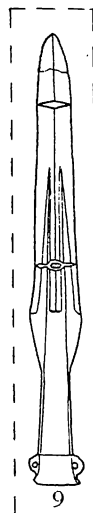
平安南道台城里一〇号墓西棺出土矛（第四図4）と忠清南道論山附近出土矛は節帯が二条である。慶尙北道入室里の二例（一例は推定）は、三条の節帯を鑄出しており、一方は釜部に雷紋風の紋様を表現し、他方は関近くの釜部両側に棘状突起様のものをつくりだしている（第四図5）。慶尙北道坪里出土矛は四条の節帯がみられる。慶州附近出土の三例は、すべて刃部に二条ないし三条の樋がみられるが、a 型式の夫租蔵君墓・美里林出土矛の樋と関連しよう。ただ釜部の紋様、棘状突起、刃部の樋の存在といった点で台城里出土矛とは趣を異にし、矛の全長が長くなっていることと共に、慶州あるいは朝鮮南部での特異な変化を示している。これは慶州を中心として、新たに平壤を中心とする矛の系統をうけついで鑄造されたことを暗示するともいえる。

（3） 狭鋒銅矛c型式 目釘孔がなく、菱環耳が釜部片側

につくのはb型式と同じである。しかし二条―四条の節帯のかわりに、釜部下端が幅広く節帯をなしていることがb



- 狭矛 a 型式 { ① 伝平壤府出土（秦銅戈伴出）
② 忠南牙山屯浦里
③ 伝慶北尚州
- 狭矛 b 型式 { ④ 平南江西台城里10号墓
⑤ 慶北慶州入室里
- 狭矛 c 型式 ⑥ 慶北慶州入室里
- 狭矛 e 型式 { ⑦ 平南大同江梧野里
⑧ 平安南道大同江面
- 狭矛 f 型式 ⑨ 佐賀県 千々賀
- 狭矛 b 型式 ⑩ 福岡県 板 付
- 狭矛 c 型式 ⑪ 福岡県 野 間
- 狭矛 d 型式 ⑫ 香川県 瓦 谷
- 中矛 A 型式 ⑬ 高知県 池
- 中矛 B 型式 ⑭ 福岡県 須 玖
- 広矛 A 型式 ⑮ 大分県 坊主山
- 広矛 B 型式 ⑯ 長崎県 志多賀



第四図 朝鮮・日本出土銅矛型式分類図

型式とは異なる。しかも耳の下端と節帯の上端の位置が対応しているものをc型式とした。次章で説明する日本出土の狭矛c型式と、形態・銅質等まったく同じといえる。耳の孔はd型式に比べて大きい。

出土例は、これまでのところ入室里(第四図6)でb型式と伴出し、坪里ではb・d型式と伴出している。中国大陆や朝鮮北部では類品の出土はない。慶州を中心とする朝鮮南部で、b型式を祖形としてつくりだされたものかと考える。矛の全長は、a・b両型式に比し長大化している。

(4) 狭鋒銅矛d型式 c型式と非常によく似かよった形態である。

ただ菱環耳のふくらみの下側の最も厚いところが、鏃に接する部分と対応する位置に、節帯の上端がくるという違いをもつ。c型式に比べ耳の孔は小さく、関の幅はやや広くなり、樋が匕面状を呈し、全長がさらに長くなる傾向がうかがえる。

慶尚北道慶州坪里・九政里で他の青銅製品と一括して出土した。日本の狭矛d型式とは全長に差がある他は、形態・銅質等ほとんど全く同じである。中国大陆・朝鮮の慶州いがいの地域では、これまで発見例がなく、c型式を祖形

として慶州を中心に製作されたものと考ええる。

(5) 狭鋒銅矛e型式 鏃部に片耳を有する。しかし、その位置が先にのべたb・c・dの諸型式とは異なり、刃部とは直角の鏃部につく。

平安南道大同江面梧野里出土矛(第四図7)は、耳に孔があり、身部断面扁橢円形を呈し、大同江面出土矛(旧諸岡榮治氏蔵)(第四図8)は耳に孔がなく、身部断面は前章でのべた洛陽焼構一一五号漢墓出土矛と同じく扁六稜形を呈す。これまでのa―d諸型式とは異なるものである。

以上の各型式について、製作・使用の時期、あるいは副葬された年代、矛の系譜はどう考えられるか。

a型式は、秦銅戈と伴出したと推定される平壤府附近出土矛が、最も時期が明確で、副葬時期の上限は紀元前二世紀の初頭であり、製作・使用の時期はさらにさかのぼるものであろうか。また「夫租歳君」墓での銀印の出土とか、黒橋里での穿上横紋五銖銭との同出例からみて、a型式中のあるものは紀元前一世紀の中頃まで使用されていたといえよう。

ではa型式の矛の祖形はどこに求められるか。地理的に最も近い中国では、第一章で検討したように、湖南地域をのぞいて、春秋期より矛あるいは戟の刺部は、無耳有穿のものが主流をしめていた。a型式が無耳有穿であるという点では、河南・河北の矛と共通しているといえる。ただ朝鮮の銅武器―劍・戈・矛―を通じてみられる特色は、太い脊部が鋒部までとおり、鑄造後刃部と同角度に鑄をどぎだし、しかも樋をつくる点である。この点に関しては、戦国中期以降、晩期にかけて発達した様相をしめす燕国の矛との関連も否定はできない。

燕王戟あるいは喜の刻銘をもつ矛は、無耳有穿で、戦国代、湖南型にみられる如く、最初から鑄部を凸出させていることは先述した。武器として鋭利であり、刺突の際の衝撃に耐えやすい形態であるのに対し、朝鮮のa型式では簡略化あるいは一つの変化があらわれたともいえるよう。しかも伝平壤府附近出土矛は、鑄は身部の全面におよび河北出土矛の鑄の位置と対応している。それに対し、a型式中でも時期の下る葛峴里・尚州例等では、鑄の位置は関部までで、祖形より変化したことを示し、それが、b・c・d、

さらには日本の銅矛にも影響をおよぼしていったことを示している。

このように祖形からの変化、新しい型式を生みだす期間を考慮すれば、a型式の製作開始を紀元前三世紀初頭あるいは紀元前四世紀に考えることも可能であろう。しかし厳密に言えば矛の祖形として、あるいは朝鮮の青銅製品に対する燕国の影響は、なお十分検討する必要がある。

b型式は直接埋葬の年代を比定する手がかりはない。従って製作・使用の時期もはっきりしない。ただ台城里一〇号西棺で同出している銅劍の形からいえば、a型式にともなう牙山出土劍や黒橋里例に比べ、やや鋒の幅が広くなり後出のものかと思える。

片耳をもつという点では、祖形として河北省電神廟発見の石範に表出された矛との関係も考えられる。

台城里一〇号墓西棺出土矛はa型式十耳という形であり、一つの変化型式ととらえることも可能である。ここでは耳に英をつけたこと、いいかえれば儀仗化に一步ふみだしたといえぬこともない。それは副葬状態をみると、棺内の遺骸身近かには、銅劍・銅矛がおかれ、棺外から鉄矛・鉄工

具類が出土している状態とも対応している。従って、銅矛等にとってかわって、実用の武器としての鉄矛を含む鉄製品の出現と、銅矛の耳の出現とは対応するとも考えられよう。このことはa型式のうちでも特に鎬の部分の長い秦銅戈伴出矛・黒橋里、屯浦里例等には、鉄製武器の伴出がなかったとおもえるのと、また無関係ではなからう。

慶州を中心とする地域では、さらに異形化が進んでいることは先述したが、鉄製武器に実用の場をうばわれたものの儀仗品化の度が一段と進んできたとも考えられる。日本ではこのb型式に属するものは弥生前期末の甕棺に限って副葬され、製作・使用の年代の下限も限定されているといえよう。

c・d型式についても年代に関する明確な手がかりはない。ただ両者とも出土が朝鮮南部、とくに慶州に限られていること、しかも儀仗品化のきざしのみえるb型式と同出していること、さらにb型式を一層長大化したものであること等より、明らかにb型式の亜種として慶州附近で鑄造され始めたものであることを明瞭に示している。日本ではc・d両型式間に副葬された年代の差が認められるが、朝

鮮では明確でない。

日本の板付Ⅰ・Ⅱ形式の土器に伴う銅矛は不明であるが、その頃朝鮮で盛行していたのは朝鮮北部ではa型式、朝鮮南部では、b型式であり、その亜種として、c・d型式がつくり始められていたと推定される。その段階での朝鮮南部と北九州の人々の間の接触の結果、b・c・d諸型式は順次日本へ舶載されてくるが、朝鮮で最も古いa型式は入ってこなかったかと考える。このことは銅戈についてもいえる。朝鮮式銅戈のうち槌の部分に紋様を鑄出するものは、西北鮮ではみうけられず、九政里、坪里等慶州を中心とする朝鮮南部特有のもので、それが日本の銅戈に影響を与えたと考えられる。

e型式は先の四型式に比べ異例品である。梧野里では明光鏡・方格規矩四神鏡・帶鈎・弩機・鉄劍・鉄刀等と伴い後漢初頭に埋葬の上限がおかれ、楽浪郡設置後の漢人墓よりの出土と推定される。先述した如く、漢代になると中国では銅利器はすたれ鉄製素環刀大刀を中心とする鉄利器にとってかわられる。身部断面六稜形の形は鉄矛よりの影響が考えられる。この頃の中国としては最終の銅矛に相当す

るものであろうか。

では銅矛の型式編年を軸として、朝鮮の初期金属器文化の特色はどのように理解しうるか。すでに西谷正氏らにより、朝鮮では銅武器類に先立つ銅鉈、多鈕鏡、ボタン状金具類を主として青銅器の製造が開始されていたことが指摘されている^⑩。それはさておき、銅剣の製造は遼寧式銅剣を祖形として、西北鮮を中心に製造が開始されたと考えられる。一方銅矛は、先述したように遅くとも紀元前四世紀末三世紀初頭には、中国の戦国文化―特に燕国との関係を考慮して―の影響のもとにつくられ始めていた。この祖形の差には当時の中国東北地方および朝鮮北部における複雑な史的背景を予測せしめる。

この起源の相違は何故生じたのか。中国では、春秋いご銅兵器のセットの中に新たに加わってくる銅剣は、戈・矛・戟等と一連の関係のもとに発展してゆく。しかし遼寧式銅剣に代表される中国東北地方の東胡族^⑪にとっては、中国の銅利器のセットのうちとりいれたものは、銅剣であって、歩兵あるいは車戦に用いる戈、戟、矛のたぐいではなかつ

た。

朝鮮において銅武器の製造が開始された際に、最初に製造されだしたのは銅剣であって、矛の製造は遅れて始まったのではないかと考える。従って、中国では成套の兵器として確立していたものが、朝鮮ではくずれており、しかも銅矛の場合、鉄製武器にとってかわられてゆくことも関係するが、儀仗品化してゆく傾向を最初から含んでいたともいえよう。

さらに朝鮮式銅戈の起源は明確ではないが、もし戦国系統の流れをくむものから派生したものとしても、中国では先述したごとく、常に、戦闘の際の有効度をより高めるように努められていたものが、朝鮮では反って退化した形であらわれる。また出土状態からみても戟は形づくっていなかった。文化の段階の差を考慮し、一つの発展としてはとらえても、中国と朝鮮での銅武器のあつかい、意識が異なっており、一つの特色を示すものと考ええる。

朝鮮の初期金属器文化の大きな特色は磨製石剣の盛行である。これまでの研究によれば銅武器類は楽浪郡治下にくみこまれた土着豪族層のものであり、磨製石剣に代表され

るものは、楽浪漢人の文化を間接的にうけた朝鮮の人々のものであったとされている。朝鮮と同様な状態であったとおもわれる弥生時代の日本では、青銅製品の総量は磨製石剣類に対し圧倒的に多い。従って朝鮮での磨製石剣の盛行の裏には、階級差、あるいは民族差が原因であるのかもしれないが、朝鮮における銅・錫等の原料の産出量の問題とも無関係ではなかったと考える。

- ① 梅原末治「朝鮮出土銅剣銅鐙の新資料」(『人類学雑誌』第四八巻第四号 一九三三年)。
- ② 永島暉臣・西谷正訳「夫租藏君墓について」(『考古学研究』第一四巻第四号 一九六八年)。
- ③ 西谷正「朝鮮発見の多鈕細線文鏡の新例」(『考古学雑誌』第五十三巻第四号 一九六八年)。
- ④ 李進熙「新発見の土墳墓遺跡」(『考古学雑誌』第四七巻第一号 一九六一年)。
- ⑤ 金元龍・樺本杜人「韓国慶北、慶州・九政里出土遺物について」(『考古学雑誌』第三九巻第二号 一九五三年)。
- ⑥ 他に忠清南道扶餘郡内山面出土矛とか沿海州イズウェストフ丘出土矛等があるが、再加工した可能性がつよいので省略した。また秦代の銘ありという伝平壤府出土矛も判断に苦しむ部分があるのでぞいた。
- ⑦ 李進熙「戦後の朝鮮考古学の発展」(『考古学雑誌』第四十五巻第一号 一九五九年)。

- ⑧ 金載元「扶餘・慶州・燕岐出土銅製遺物」(『震檀學報』第二五巻六・七合併号 一九六四年)。
- ⑨ 劉心源「奇觚室吉金文述」卷十一 一九〇二年。

于省吾「雙劍諺吉金圖録」一九三四年によれば鄭王載は燕の昭王(紀元前三一一二七九年)に一応比定している。喜王の在位は紀元前二五四―二二二年。

- ⑩ 西谷正「朝鮮における金属器の起源問題」(『史林』第五〇巻第五号 一九六七年)。

⑪ 秋山進午氏の説によった。秋山氏は遼寧式銅剣の第Ⅱ型式の年代を紀元前三世紀に中心があり紀元前二世紀にまでおよぶとの考えのようである。

○資料の中で特に文献を引用しなかったものは、梅原末治・藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』第一巻 一九四七年と藤田亮策・梅原末治・小泉順夫「南朝鮮に於ける漢代の遺蹟」(『大正二十一年度古蹟調査報告』一九二四年)によった。

三 日本出土の銅矛を中心として

すでに朝鮮―とくに朝鮮南部―において儀仗品化の方向に歩みだしていた銅矛は、日本ではどのような変化をみせたかを検討することが、次の課題である。型式分類の基準として、銅矛銚部の耳の有無を基準とするのはこれまでと同じであるが、宇木汲田出土の例外的な一例をのぞいては、すべて耳をもつので、特に銚部基部の節帯と耳との位置関

係、広鋒銅矛では鐏の有無をとりあげた。その結果、狭鋒銅矛 b・c・d・f の四型式、中鋒銅矛と広鋒銅矛をそれぞれ A・B の二型式に大別する。

(1) 狭鋒銅矛 b 型式 (第四図 10・第六図 1) (全長一六・五―二二・五 釐)

朝鮮出土狭矛 b 型式とまったく同じといえる。福岡県板付の甕棺内より出土したと推定される二本と、佐賀県徳須恵の甕棺内より出土した一例しか、これまでのところ知られていない。分布状態よりみて、b 型式の銅矛は、朝鮮の平壤附近で鑄造されだしたものが、当時の北九州と種々関連深い慶州あたりを経過して我が国に将来されたものと考える。

(2) 狭鋒銅矛 c 型式 (第四図 11・第六図 2) (全長二八・八―四六・七 釐)

朝鮮出土の c 型式と型式的に全く同じである。福岡県下では板付の甕棺内より一本、須玖岡本の支石墓下の甕棺より四本、野間町門ノ浦、東京国立博物館所蔵伝筑紫郡出土例があげられる。佐賀県では、宇木汲田の甕棺中より森本六爾氏の報告された二本と、東亜考古学会が調査した際に

同じく汲田の甕棺中より二本出土している。^④

分布からみれば、c 型式は福岡県と佐賀県の玄海灘にくく近いところに限って出土しており、朝鮮では慶州の二例が知られているだけである。従って、この c 型式の銅矛は、南鮮よりの舶載品と考える。

なお東亜考古学会が調査した際に出土した c 型式の矛のうち一例は、銚部基部に耳がなく、もと耳がついていたとおもわれる箇所にも二個の孔があげられ、下方の孔と対応する位置に一個の孔があげられている。なんらかの事情で耳がとれたのを利用して孔をあげたものであろう。弥生時代の我が国出土の銅矛で、耳がなく目釘孔をもつものは、この一例だけである。

(3) 狭鋒銅矛 d 型式 (第四図 12・第六図 3) (全長五四・六一―六八・八 釐)

全長が c 型式にくらべ、さらに長大化していることが特色とされ、また耳と銚部基部の節帯の位置関係については、朝鮮の d 型式のところでのべたのと全く同じである。ただ朝鮮では、例えば坪里出土矛が全長四三・六 釐であるのに対し、日本出土の d 型式は、一一―二〇 釐も長大化してい

る。c 型式にくらべ耳の孔は小さく、鑄造後の穿孔の可能性もあろう。次にのべる中鋒銅矛にみられる耳端のふくらみ（甲張りの転用）は長崎県三会出土の一例のみで、他のは鑄造後きれいに研磨されている。

福岡県下では、須玖岡本D地点よりc 型式と共伴した一例があり、三雲では甕棺内より多数の前漢鏡とともに二本出土している。また立岩の堀田一〇号甕棺内より出土の一例、岡垣村では銅剣・銅戈と伴出したといわれる。佐賀県では唐津市久里の甕棺と柏崎で甕棺内より出土している。熊本県今古閑の四本は埋蔵遺跡よりかと推定される出土状態を示し、玉祥寺でも一例知られる。広島県尾道大峰山では、山腹の大石近くより細形銅剣二本とともに埋蔵遺跡より出土している。同様な状態は香川県瓦谷でもみられ、円山の一例もあるいは埋蔵遺跡よりと推定される。

分布からみると、b・c 型式が福岡県と佐賀県の海岸に比較的近い甕棺墓より出土したのとは異なり、瀬戸内中部にまで及んでいる。しかも福岡・佐賀等の当時の先進地域では相かわらずd 型式も甕棺内に副葬されているのに対し、熊本・広島・香川の各地では、単独あるいは内海地方特有

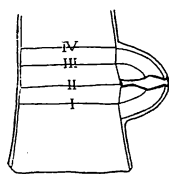
の平形銅剣とか平形銅剣に近くなった細形銅剣とともに埋蔵遺構より出土していることが注目される。

このd 型式の段階より九州の先進地域と瀬戸内中部あるいは九州の後進地域では、銅矛のとりあつかい方が、かわってきている点を強調しておきたい。

分布状態とこれまでの出土総数、さらに矛の全長の差を考慮して、このd 型式の段階より、南鮮の技術者により、銅矛が、弥生時代の北九州を中心とする人々の好みに応じて我が国で鑄造されたものと考ええる。

(4) 狭鋒銅矛f 型式 (第四図9) (全長三六・二釐前後)

これまでのべた朝鮮・日本の四型式の矛とは異なり、鍔部基部の両側に耳がある。耳孔は鑄造後の穿孔かと推定される。佐賀県千々賀字ノ木では甕棺内より銅戈と伴出した一例がある。長崎県三根サカドウでは、粗製組合式石棺かと推定されている遺構より触角式銅剣・平鏢等と共伴して一本出土した。矛は鋒部を欠くが、細部を比較すると宇ノ木例と全長に大差はない。共伴した銅製平鏢は慶尚北道魚隱洞出土のものと同範かとされている。朝鮮に類例はこれまでのところない。中国の殷式銅矛は両耳をもつもので



第五図
中鋒銅矛基部変遷

① I の位置に鑿部基部の節帶上端が位置するものは、五六本中一一本。

② II の位置、あるいはそれをやや上下する位置に鑿部基部の節帶上端がくるものは五六本中三七本。

③ III の位置に鑿部基部の節帶上端がくるものは五六本中六本。

④ IV の位置に節帶上端がくるものは五六本中二本。

あるが、両者の間に時期差が大きすぎ直接の結びつきは考えられない。触角式銅劍等と関連の深いことが推されるが、その系統、鑄造箇所と推定等は今後の検討を待ちたい。f 型式も日本では盛行しなかった。矛の型式がすでに定まっていた—いいかえると弥生時代の人々の好みがつすでに固定していた時期—に遅れて入ってきたためであろうか。

5) 中鋒銅矛A型式

（第四図13・第六図4）

狭矛c・d型式の段階では、一定の明確な規律のもとにあった耳と鑿部基部の節帶の位置関係は、この中矛の段階にいたって乱れがみえ初める。具体的にいえば第五図のうち、

以上の検討の結果、私はこれまで中鋒銅矛として一括してとりあつかわれてきたものを二型式に大別した。私が中矛A型式としたのは①のものである。全長は七一―八九釐を呈し狭矛d型式よりも全長において七・五―三五・五釐の差をもち、幅も増大している。

出土例は福岡県恵子字向、^⑫藤田^⑬で各々一本出土し、長崎県では対島の大綱で二本、佐護神御魂神社に一本蔵されている。大分県では京ヶ尾で一本、熊本県山西鳥子で一本、^⑭京都国立博物館に伝菊池郡出土のもの一本がある。四国では、愛媛県東宇和四郎谷^⑮、高知県石丸、高知県三里池で各一本出土している。

注目すべきことは、以上のべた銅矛のうち、耳に穿孔のあるものが七本あることである。特に恵子字向では、同出三本のうちA型式に属する一本にのみ耳部の穿孔があり、次にのべるB型式に属する二本には、耳に孔があげられていない。大綱では、一一本の中矛が共伴していたが、A型式に属する二本には、すべて耳に孔があげられており、B型式に属する九本のうち二本のみに耳部穿孔がみられる。分布からみると、狭矛d型式よりもさらに出土範囲が広

がっており、対島の西海岸沿いと豊後水道側の大分と愛媛、太平洋側の高知で新たに出土するのに対し、瀬戸内海ではこれまでのところ出土していない。すべて埋蔵遺構より出土している。

中矛A型式は日本出土の狭矛四型式のうち、d型式を祖形として、そのまま形を大きくしたものである。特にそのことを明瞭に示しているのが、耳と銚部基部節帯の位置関係、および耳の穿孔である。ただ狭矛d型式では、耳端周縁の隆起線は先述したように、鑄造後の研磨により見られないが、中矛Aの段階以降では、かえって紋様化されてゆく。銅鐸の場合、甲張りが鱗として紋様化されてゆくと同じ過程をたどっているといえよう。

(6) 中鋒銅矛B型式 (第四図14・第六図5) (全長七二・八一・三厘)

先述した耳と銚部基部の節帯上端の位置関係のうち最も多数を占めている㊸をB型式とした。出土例は第一表にみられる通りである。

第一表 中鋒銅矛B型式出土表

福岡県 須玖三本、女山二本、須玖西方十本中四本、恵子向二本、坂

本一本、朝倉郡下淵一本、浮羽郡弦掛一本。

長崎県 老岐東触一本、鯨伏一本、対島佐護クビル一本、如加岳大綱

一一本中九本、仁田檜流観ノ内一本。

大分県 帆足八幡神社蔵一本。

熊本県 阿蘇山西島子神社蔵一本、阿蘇小口宮原神社蔵一本。

鹿児島県 曾吹郡下原一本。

山口県 神上寺蔵二本(現存一)。

岡山県 京大蔵伝岡山県。

愛媛県 川の江金生川一本、東宇和寺蔵一本。

香川県 香川郡下ノ山山林中二本。

そのうち耳部に穿孔のあるものは、大綱の二本と愛媛県出土の二例および旧有馬伯所蔵の一例しかなく、A型式とは数の上で格段の差がみられる。A・Bいがいに型式としてとりあげなかった㊹・㊺では耳部に穿孔はない。またA型式とはことなり、B型式では銚部に中子砂がつまったままのものが大部分である。分布範囲はA型式よりもさらに拡大しクビルいがい埋蔵遺跡より出土している。福岡県と対島に数量的に最も多いことが注意される。

(7) 広鋒銅矛A型式 (第四図15・第六図6・7)

広鋒銅矛は、これまで一般に退化型式の最たるもので、鑄放しのままであり、鑄造後研磨が加えられず、脊に錆も

ないとされてきた。しかし詳細に検討してみると、鎬をもつものが多数であり、また先述してきた矛の型式分類の基準に、私が採用した鋤部基部節帯と耳の位置関係にも無関係ではないことが判明した。

これまで一括して広矛とされてきたもののうち、私は脊に鎬のとぎだされているものを広鋒銅矛A型式とした。A型式中には関近くの脊に、鑄造後陰刻の線を表出しており、また鋤部基部に陰刻の線をもつものが多数認められる^⑧。先述してきた、朝鮮、日本の各型式の銅矛は、すべて鎬が刃部と同角度にとぎだされるため関近く鎬の最下端に相当する脊上には、段をなす。それに対応し広矛A型式では、わざわざ陰刻の線を表出している。また鋤部基部の節帯の名ごりとして、同じく鑄造後、節帯の上端にあたる位置に陰刻の線が表出されている。これは中矛よりのさらに型式的な退化を示しつつも、なお中矛以来の伝統を襲踏していたことを明確に示すものに他ならない。

鋤部基部の陰刻の線と耳との位置関係、および耳の形を検討してみると第二表に表示するように広矛A型式は

① 菱環耳より変化した扁平板状の耳の両面に、断面は

ば三角形、あるいはカマボコ状を呈する隆起線が二条孤状に走り、耳の中央に対応する鋤部に陰刻の線があるもの。四四本中一九本

② 耳の両面に上述と同様の隆起線が三条孤状に走り、耳の中央に対応する鋤上に陰刻の線があるもの四四本中七本。

分布からみると、福岡県をしのいで、対島に出土数が圧倒的に多くなるのはこの広矛A型式の段階からである。また瀬戸内海地域では、現存のものは愛媛にのみ出土が知られ、中矛B型式とは異なった様子を示している。これは内海地域での平行銅剣の盛行と無関係ではなからう。

(8) 広鋒銅矛B型式 (第四図16・第六図8・9)

脊に鎬がないものをB型式とした。B型式では、鎬と本来関係する、関近くの脊上の陰刻の線はまったく表出されていない。また鋤部基部近くの、節帯の上端を示す陰刻の線はほとんどのものになく、二九本中わずかに二本のみとなり、広矛A型式との差を如実に示している。

この段階が、我が国の銅矛の中で型式的にも時期的にも、最も後出のものであるといえよう。これを耳部の紋様を手

第二表 広鋒銅矛Aの耳と袋部基部刻線の位置を基準にした細分表

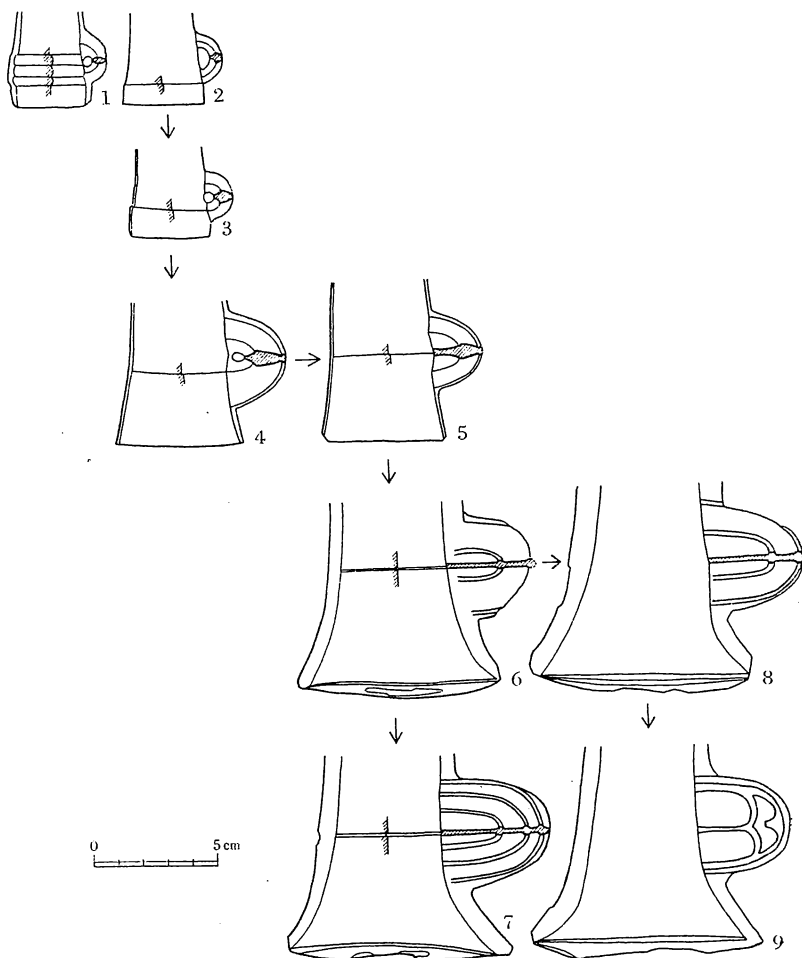
広鋒銅矛B型式



福岡県筑紫郡春日町須玖岡本辻 ◇ 福岡市日佐上白水・門田 ◇ 福岡市安徳原田（京大蔵）	1 ? （同出9本うち6本図なし） 1 ? 1							1	
佐賀県佐賀市高木瀬町上高木 ◇ 三養基郡北茂安・西尾	1				1				
長崎県上県郡上県町佐護クビル ◇ 上県郡峰村吉田白嶽神社 ◇ 上県郡峰村吉田鉾山神社 ◇ 上県郡峰村木坂海神社 ◇ 上県郡峰村志多賀那須加美金子神社 ◇ 下県郡美津島町高浜下ヒナタ ◇ 下県郡美津島町黒瀬八幡 ◇ 下県郡美津島町加志太祝詞神社 ◇ 下県郡豊玉村黒島 ◇ 下県郡豊玉村卯麦	1 1 2 ① 1 1 1 6 1		1				1	1	
愛媛県東宇和郡宇和町西山田	①								
高知県南国市田村カリヤ					1				
住友蔵(出土地不詳)		1							
前土数合計	20	2	1		1	3	1	1	1

第三表 広鋒銅矛B型式の耳による細分表

註 ○で囲むのは表示していないが刻線基部にあるもの



第六図 日本出土銅矛型式分類図

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 狭矛b型式 板付(福岡) | 2 狭矛c型式 野間(福岡) |
| 3 狭矛d型式 三会(長崎) | 4 中矛A型式 京ヶ尾(大分) |
| 5 中矛B型式 下ノ山(香川) | 6 広矛A型式 坊主山(大分) |
| 7 広矛A型式 坊主山(大分) | 8 広矛B型式 卯麦(長崎) |
| 9 広矛B型式 原田(福岡) | |

がかりに検討してみると

① 広矛A型式の①と同じく扁平板状の耳の両面に、二条の隆起線が孤状に走るものが最も多く、二九本中二〇本をしめている。

② 第三表にみうけるように三条の隆起線を表出するものがあるが、特に注意したいのは広矛B型式のみにみうけられる耳部紋様の変化である。長崎県志多賀那須加美金子神社蔵中の二本とか、京大蔵福岡県安徳原田出土矛のように、孤状の隆起線のうち、一番内側のものがワラビ手状化したり、または孤状の隆起線の内側へ、Y字状のものが表出されている例である。

分布からみると、広矛B型式は、A型式にくらべ、さらに出土する範囲がせばまっており、対島に出土例が多く、いぜん福岡県でも出土していることが注意される。

以上本章でとりあつかった銅矛は、耳の形、耳と鍔部基部節帯との位置関係、鍔の有無等をもとに検討した結果、型式的には朝鮮のd型式を祖形とし、それをそのまま長大化した型の中矛A型式の段階、さらに節帯の位置に変化のみられる中矛B型式の段階、また中矛B型式を型の上では

そのまま踏襲し、それを大型化し、造りとか、銅質の上で退化を示している広矛A型式の段階、さらに最終的に退化の極点に達した広矛B型式の段階へとの変化を明確にしえたと考える。

◇ 矛の鑄造

先に狭矛d型式の段階より、我が国で銅矛が鑄造され始めた可能性を指摘した。鑄型の出土という形では、まだ裏づけられていないが、実際にこれまで出土している銅矛の石範について、鑄造の問題を検討してみたい。

(1) 中鋒銅矛の石範 東大考古学研究室蔵の福岡県筑紫郡春日町須玖岡本出土例は、岡崎敬氏により始めて中鋒銅矛の鑄型であると指摘された^②。現在確実に中矛の鑄型であるといえるのはこの一例だけである。ただ鍔部基部を欠損するのでA・Bいずれの型式の鑄型であるかは明らかでない。

実際に検討したところ注目すべきことは、鍔の部分からかじめ鑄型にほりこまれていることである。鍔を最初から鑄型につくっておくことは、鑄造後の研磨の労力を省くことを意図したものであろうか。この場合参考になるのが、

朝鮮大同郡栗里面将泉里^㉔および京畿道竜仁郡慕賢面草美里出土の滑石製細形銅劍鑄型および福岡県粕屋郡志賀町大字勝馬字裏^㉕で出土した砂岩製細形銅劍鑄型である。

将泉里例は、朝鮮・日本出土の細形銅劍に特有の脊の鑄も、刃部の身の割り込みもない。それらは鑄造後、刃部を研磨する際につくりだされたものである。一方草美里例では、鑄はつくりこまれていないようであるが、身の割り込みに対応するとおもわれる位置に鑄型の段階であらかじめカーブがみられ、勝馬例ではさらにそれが顕著になっている。銅劍の刃部の割りこみは、遼寧式銅劍の刃部のカーブを、朝鮮において模倣した結果あらわれたものである。それを鑄型の段階からつくりこんでおくことは鑄造後の研磨の労力をはぶく意図ともいえるし、一方では型の上での固定化、型式化ともいえよう。中矛の鑄が鑄型につくりこまれていることもこのような関連のもとに理解しうる。従って長大化した銅矛を鑄造する技術の確立に対応した工夫がそこにも読みとれる。

(2) 広鋒銅矛A型式の石範 福岡県筑紫郡春日町須玖皇后峰出土例^㉖(熊野神社蔵)が広矛A型式の石範である。この

鑄型にもあらかじめ鑄がつくりこまれていることを確認した。型式分類のところで広矛A型式の段階では、中矛B型式を忠実に模倣している点は指摘したが、鑄型自身でも中矛製作時の名ごりがみうけられることがわかる。

この皇后峰出土の鑄型の耳は隆起線が二条孤状に走っている類であり、型式分類の広矛A型式^㉗に相当する。当然のことながら、関のところに脊上に陽出の凸線も、銚部基部近くの陽出の凸線も、鑄型には表出されておらず、両者が、中矛B型式を忠実にふまえて、鑄造後、その位置にわざわざ刻まれたものであることを裏がきしている。また耳部の孔は鑄型上にも陽出されていない。

他に福岡県糸島郡三雲字川端^㉘、福岡県筑紫郡高宮出土の鑄型断片にも鑄が刻みこまれている。さらに福岡県筑紫郡五十川出土(五十川妙楽寺蔵)の広矛の鑄型は、耳部を含む銚部のみを残すだけで鑄の有無は不明であるが、耳は孤状の隆起線が三条表出され、一番内側に横に隆起線が一条、銚部に接する部分から孤線の方に向かって表出されている。第二表によれば、この形の耳をもつものは、これまでのところ長崎県佐護クビルで出土している一例のみで、あるい

は広矛A型式の鋳型かとも考えられる。

広鋒銅矛Bの石範の確例は、写真あるいは拓本からは発見しにくいのが当然存在したであろう。従って鋳型をうらづけとして先述した型式分類を考慮すると、我が国では、狭矛d型式の段階より広矛B型式の段階まで石範を外形として銅矛の鋳造がおこなわれていたと結論しうる。それらに対応する他の青銅利器についても同様なことが推定しえよう。しかも鋳型自身に型式変化の過程が忠実にふまれていることは、銅利器を鋳造する際の意識がどのようなものであったかを示しているといえる。

鋳型の分布を見ると、中矛の鋳型はこれまでのところ福岡県須玖の一例だけである。しかもこの中矛の段階で、実際に出土している銅矛の分布は、最も広範囲にわたっている。広矛Aの段階になると、鋳型は福岡県須玖、筑紫郡高宮、五十川、糸島郡三雲などで知られている。その結果中矛より広矛AあるいはBにいたる期間中、銅矛の製作は筑紫郡を中心に継続して行なわれており、とくに須玖周辺は有力な中心であったと推定しうる。また狭矛d型式が、九州の先進地域——須玖とか三雲——で甕棺内より出土してい

るのも鋳造地点と無関係ではなからう。

◇年代について

狭矛b型式が副葬されていた板付の甕棺は前期末に比定される。^③狭矛c型式は、板付で出土している甕棺の形式は不明であるが中期の甕棺片も採集されている。宇木汲田の甕棺は中期前半と比定されており、c型式の矛が、中期初頭には朝鮮で製作され、伝世の後埋葬されたものであろうか。

須玖岡本D地点の甕棺は中期中葉のものであり、前漢鏡の多量な副葬といった共通点をもつ三雲の場合も同じ頃に考えられよう。立岩の甕棺は須玖式につぐ中期後半に比定されている。従って、板付の甕棺にd型式のともなわぬことより、狭矛d型式は前期末にはまだなく、中期前半から中葉にかけて狭矛c型式を手本として須玖近辺で、朝鮮の工人によりつくりだされた可能性が高い。

中矛A型式はB型式に先立ち鋳造され始めたこと、狭矛d型式よりスムーズな移行を示すことより考える。時期を明示する資料に乏しいが、柏崎では、中矛A型式と狭矛d型式の共存した可能性がみられる。また福岡県恵子と長崎県大綱ではA・B両型式が共存し、A型式には、すべて耳部

に穿孔を有することを指摘した。長崎県クビル遺跡では箱式石棺中金海式土器をまじえた、弥生後期の土器とともに、中矛B型式一本、広矛A型式二本、広矛B型式一本とが共存していた。従って弥生後期初頭（立岩に中矛Aを見ぬことより）中矛A型式が製造され、時をおいて中矛B型式が製造されたと推定する。立岩につづく桜馬場以後になると、甕棺への銅矛の副葬はなくなり、かわって巴形銅器、銅釦等が副葬され始め、国産銅器製造の上に一つの新生面が見られる。この時期が銅利器の上でも、全長をより長大化しようとする転換期の中矛A・B型式と対応するといえよう。

広矛Aは大分県坊主山^④で七本同出のものがすべて一括して出土しているいがい、長崎県黒島、卯麦、クビルでB型式と同出している。時期は不明であるが、広矛A・B両型式の製造、使用は少くとも弥生後期より終末期にかけておこなわれたものであろう。

我が国では弥生前期末をややさかのぼる頃に、銅矛を含む銅利器は、南鮮から舶載され、まもなく当時の有力者の

墓に副葬された。武器として実用には耐えるとしても、実際には使用されておらぬ可能性が高く、中国という班劍、あるいは儀刀として輸入されたものであろう。それは朝鮮南部で、すでに鉄製武器に対応するものとしての、青銅武器の儀器化への方向と一致をみており、我が国での銅利器の性格として、最初から一定の方向づけが行われていたことを示している。

狭矛b型式の段階に先立って、磨製石剣の存在があったことがいわれているが、私自身はいまだ検討していないので、ここではふれない。ひきつづき狭矛c型式が舶載された後、弥生中期前半より、我が国でも南鮮の工人の手により、我が国人の好みに応じた狭矛d型式が製作され始め、銅器製造の中心であったと推定される須玖地域では、弥生中期、大量の前漢鏡等とともに、銅矛を含む多数の利器の副葬がみられる。奴国の後漢への朝貢の年代とほぼ合致し、一方で国産銅利器をつくりださしめる地域社会の力が、漢への朝貢といった形をも生みだしたのであろう。

このd型式の段階では、北九州の佐賀・福岡等の先進地域では、いぜん甕棺内に副葬品としておさめられているの

に対し、九州でも後進地域あるいは瀬戸内海地域では、単独あるいは、細形銅剣や平形銅剣とともに埋蔵遺跡より出土しているという状態がみられる。このことは、内海地域等におけるd型式の伝世が考慮されるとしても、例えば香川県瓦谷例のごとく、d型式と共伴した五本のうち一本の銅剣には、銅鐸と共通する紋様が鑄出されており、畿内との関連の深いことがうかがえる。しかも前期末にさかのぼる銅鐸の埋蔵遺跡への納置とも共通している点注目すべきであろう。

私は銅矛の長大化、すなわち狭矛d型式より、中矛A型式の変化のうちに、銅鐸祭祀による影響を考えたい。銅鐸はすでに型式化、巨大化の方向へ歩みつつあった。それにとまなう風習―埋蔵するという習慣をも含めて―が瀬戸内を経由して逆に北九州に入り、銅矛の長大化、あるいは他の銅利器の型式化を生みだしたと考えることはできないだろうか。その結果つくりだされた中矛A・B型式が、北九州の先進地域でも埋蔵遺跡より出土するのは当然といえよう。森貞次郎氏は鉄器の流入による銅器の長大化をとかれるが、私は立岩の鉄戈にみるごときは、むしろ青銅利器儀

器化の過程での、鉄製利器への影響とみる。

あるいは北九州先進地域での狭矛d型式の甕棺への副葬は、奴国の首長の支配下におかれた銅矛の鑄造と関連し、生産地での特別な現象を示すものかも知れないが、このことは銅剣先だけの甕棺への副葬をも考慮してなお今後の検討を待ちたい。

瀬戸内海では中矛A型式の矛はなく、B型式があらわれ、広矛の段階になると消滅の方向に向う。このあり方と最も関連深いのは、平形銅剣の内海地域での鑄造およびその盛行であろう。一方対島では、中矛A型式いご中矛B型式にいたるまで、ほとんど西海岸からしか矛の出土はなく、当時の朝鮮、中国へのルートを示しているようである。また広矛A・B型式の段階でも西海岸沿いが圧倒的に多い。老岐との出土数の差は、対島の対朝鮮、中国への渡海する最終基地の重視のあらわれか、魏志倭人伝にも、老岐には官がおかれたのに対し、対島には大官がおかれていたことも関連しよう。

中矛B型式の段階いご、すなわち中期末、後期初頭いご、銅矛は筑紫郡を中心とする鑄造権をにぎった人々と、銅矛

をうけとった人々との間に一定の恒常的な関係をもちつづける。あるいは場所としての対島の重視であって、対島の人々を重視してはいないのかもしれないが、最も端的に示すのは、対島のクビル遺跡である。銅矛に附加されていた意義は、唐泊沖の海底出土の矛をも考慮して、中矛いごの段階で航海の祭祀の対象物へと変化をひきおこしたものであろうか。

中矛B型式を忠実に模倣した広矛A型式いご、他の銅利器ともども銅質は一転して粗悪になる。銅原料の問題が当然考慮されなければならぬが、一つは鑄型でみるように製作の際労力がはぶかれ、対象物としての機能に変化がなければ、大きくてそれらしいかっこうをしておればよいといった考え方が生じてきたためともいえる。このことは中矛A型式に先立つ弥生中期の段階で、石斧などにはすでに機能化への指向性がみられるのに対し、祭祀に使用されるものには、その変化が一段階も二段階も遅れておこったことがわかり、当時の人々の生産用具に対する意識との差を明瞭に示しているといえよう。一方銅鐸の方では広矛A・B型式に対応すると考えられる突線鈕式銅鐸の段階でも錫分

の減少は、指摘されているとはいえ、銅矛も含む銅利器ほどには顕著でなく、畿内と北九州での原料の所有差も影響しているよう。

以上銅矛をつうじて我が国の弥生時代のあり方をみた場合、大きな特色がみられる。それは、鑄銅技術としての利点をフルにいかし多様なものを生みだすことが少く、一方向的な変化しかみられぬことである。一定の型式にのっとっていなければ、広矛A型式にみられる如く銅矛とは認められなかったものであろうか。同様なことが平形銅剣や銅鐸の場合にもいえる。愛媛県一万出土の平形銅剣では、突起部の鑄損じをわざわざ、銅鐸の場合と同様な手法で鑄かけてあり、銅鐸の場合、型もたせの周囲を鑄損じたものを、わざわざ型もたせの孔だけを残して、他の部分を鑄かけてある^⑤。また補刻されている鐸があることも同様な趣を示すと解せられる。

また視点をかえて銅矛なら銅矛を見た場合ということがいえるか。ここで注目すべきは広矛A・Bの段階における耳部紋様の多様化のきざしである。詳述したように我が国での銅矛の型式は最初に鑄造開始されて以降、形の大小

の差はあれ一定の基準にのつとっていた。それが、この広矛A、とくに広矛Bの段階において、耳部紋様に変化がみうけられる。その変化が機能的なものではないことはさておき、このことは、鑄造技術者が石型に矛の形をほりつける時、彼等の頭の中では、一定の型式にのつとったものが、ありありとかんんでいたと私は考えるが、その自己の伝統的にうけついで、あるいは無意識のうちに習慣となりおおせていたものの、打破がみられるのではないかということである。工人の伝統的観念をうちやぶつての飛躍あるいは創造ということを、例えば矛なら矛の紋様の変化、あるいは他の独特の器形の製作ということにみれば、次に問題になるのは、何故その段階において、はじめて創造があり飛躍があり得たかということであろう。時代の制約下にある人々の心が、直接、作りだすものに反映するか、しないか、その場合の、例えば工人の身分というものと創造の心とがどう結びあうのか等に、わずかに銅矛をのみとりあげて云々することに問題はあろうが、少なくとも弥生後期後半における新しい気運へ、―それがたとえ、銅矛がすでに必要とされない退化型式としてのあらわれとしても―の動

きが認められよう。

新しいものをつくりだしても、それをうけいれる心がなければ、つくりだしうる技術、創造の心はあっても、生みだされないし、またひきつづいては行なわれないのであろうか。中国における銅容器にともなう祭祀が、朝鮮、日本の青銅器鑄造開始の頃はすでに下火になっていたとはいえず、楽浪郡治下の漢墓にがい銅容器のほとんど出土していないのも関連があるのかも知れない。

最後に銅原料の問題にふれておきたい。中国では西周以降の銅器金文をみると、しばしば王より貝、車馬、布、鬯、帛、豚、卣、珣圭、瓊璋、臣、鬲、土等を錫わり、その休に答えて銅器を作っている。特に青銅器の鑄造そのものと関連深いのは、金あるいは赤金を賜わり、それをもちいて青銅器を鑄造したことを明記した金文である。例えば西周初期の禽殷には^⑩

王伐櫛侯、周公某禽珣、禽有岐珣、王錫金百孚、禽用作宝彝

とあり、宣王代の師寰殷には^⑪

王若曰、師寰□、淮夷孫我費臨臣……敵孚士女羊牛卒吉金、：

…余用作朕後男谿尊殷……

とあり、また戦国末の楚王會志盤^⑨には

……楚王會志戰獲兵銅 正月吉日鑄少盤以共獻嘗……

とある。西周初期においては、周王あるいは周王を補佐した公伯より銅を賜わり、青銅器をその家の先祖をまつるために鑄造している。実際に鑄造したのは、周王室の直轄下にあった百工のうちの工人がおこなったことが、令彝などの金文より推測されるが、青銅の原料自身も周王室の管理下におかれたものであろう。

禽殷の金文では淮夷地方を伐った功により銅を賜っているが、その背景に銅原料獲得のねらいがあったのかも知れない。南方の楚国あるいは東南淮夷地区は、古代より銅錫の産出が豊富であったことが知られるが、西周後期の師寰殷にみられる如く、周初より臣属下して帛と農産物を貢納していた淮夷の反乱を征し、銅を獲得したこと等により、西周代銅原料の獲得の手段として、楚国、淮夷の征伐によった場合のあったことが知られる。

しかし楚国あるいは淮夷の地域で鑄造された銅容器、あるいは銅兵器を鑄つづいて新たに銅器を鑄造したとは考え

られない。なぜなら春秋以前においては、特定の祖先を祭るのには、特定の家のものでなければならなかった。ところが楚王會志盤にみられるように、戦国も末年になると大国は、弱国を併呑し、祭をたやしてしまふ。そして銅原料として、他国の銅兵器あるいは銅容器が利用されたことが知られるのである。

朝鮮の場合は、文献の上に銅原料の記載はほとんどでこず、高麗とか李朝の文献に限られるようである。しかもすでに藤田亮作氏によって指摘されているように銅原料を日本から輸入して不足を補っていた可能性もある。日本と朝鮮における当代の青銅製品の総量の差は、漢帝国の直接の支配下におかれたための、土着社会の発展の圧迫とも無関係ではなからうが、原料の多寡とも関連深からう。

日本においては、銅鐸の原料として舶載銅利器の鑄つづし説、あるいは中国の貨銭説等があげられているが、舶載銅利器を原料としたとするとどういうことが考えられるか。舶載銅器の起源は朝鮮にあったことは詳述したが、朝鮮での青銅製品の総数は日本より少く、しかも交易の形なら、なんらかの見返りの品がいる筈である。当時の朝鮮と日本

の交流の形は、新羅時代に日本への朝貢品として金・銀・銅鉄、鹿皮等^①がもたらされたような状況ではなかったともわれる。従って銅利器を鑄つぶして銅鐔を作ったということは再考の余地があろう。貨銭原料説はどうか。中国東北地方では明刀銭、五銖銭などが、数匁も一括して出土しているが、朝鮮、日本でのありかたは一、二枚が埋葬遺跡よりでる程度である。従って貨銭の場合も、貴重視されているといえ、銅原料としては疑問がのこる。私は、日本の鑄型が、朝鮮の滑石とは異なり、砂岩製であることも関連して、その地に適した鑄型を使用し、銅原料も我が国のものであるものではなからうかと考えるが、これについてはまた稿をあらためて検討したい。

以上銅矛を中心として、中国・朝鮮・日本でのあり方をみてきたが、三者を対比して青銅利器を鑄造していた社会はどのようにとらえることができるか。

中国では安陽後期に完成した形で出現した銅矛の系統は、西周初期にとだえる。それは西周いご武器としてより実用に耐え、しかも武器として合理的な方向へと歩みをすすめ

てゆく。春秋以降、戦国にかけて銅利器は各地で特有の變化型式を生みだしつつも、いぜん鉄製武器と同等な立場を確保していた。あるいは河北型の流れをうけつぎ、あるいは東北地方の胡族の影響のもとに、漢の楽浪郡設置以前に銅利器鑄造を開始した朝鮮では、青銅武器はいぜん武器としての明確な意図のもとにつくられている。しかし南鮮で鑄造がおこなわれる頃には、すでに鉄器の使用が盛んであり、青銅利器は異形化のきざしが見え、儀器化の傾向がうかがえる。

その南鮮の工人を将来して、青銅利器の鑄造が始まった日本では、鑄造という利点をフルに活用して、多様なものを生み出す可能性をきりすて、弥生時代の人々のこのみにあったもののみを忠実につくりつづけてゆく。銅武器の特殊化とともに、没個性的なものを工人に要求する社会の規制力といったものが強く感じられる。前代の縄文文化以来の伝統が、本来の利器としての機能をねじまげていったものであろう。大きくわけて中国と朝鮮北部は同一面ととらえ得、朝鮮南部と日本とが同一面ととらえることができ、以上によって、日本・朝鮮の初期金属器文化の一側面をう

かがい得たかと考える。

なお資料の収集にあたって多大の御協力をいただいた藤田国雄・野口義麿・木内武男・藤本強・小林行雄・水野清一・林巳奈夫・鈴木博司・小野山節・西谷正・韓炳三・鏡山猛・岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄・亀井勇・渡辺正気・宮小路賀宏の諸氏、長府博物館の皆様に厚く感謝する。

- ① 吉村茂三郎「徳須恵の甕棺地帯に就て」(『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯 一九四〇年)。
- ② 梅原未治「許斐氏旧蔵筑前須玖発見の銅鉾銅剣」(『人類学雑誌』第二五卷第二号 一九三七年)。
- ③ 森本六爾「肥前松浦潟地方に於ける甕棺遺蹟とその伴出遺物」(『考古学』第一卷・第五・六号 一九三〇年)。
- ④ 水野清一先生の御好意で実測させていただいた。他に九州大学が中心となつて行つた唐津綜合調査の際にも同型のものが汲田甕棺群中散布した中期の土器片にまじり出土している。
- ⑤ 島田貞彦「甕棺内新出の玉類及布片等に就いて」(『考古学雑誌』第二二卷第八号 一九三一年)によれば甕棺と銅矛の關係は不明である。
- ⑥ ⑧ 東京国立博物館「新たに国の保有になった埋蔵文化財特別陳列目録」一九六五年。
- ⑦ 森本六爾「肥前松浦潟地方に於ける甕棺遺蹟とその伴出遺物」(『考古学』第一卷第五・六号 一九三〇年)。
- ⑨ 木下 忠「尾道市大降山出土銅鉾銅剣について」(『広島考古研究』二一九六〇年)。
- ⑩ 坪井清足氏の原因を小林先生より借用した。

- ⑪ 増田精一「長崎県対馬調査報告(一)」(『考古学雑誌』第四九卷第一号 一九六三年)。
- ⑫ 中山平次郎「新発見の銅鉾」(『考古学』第一卷第五・六号 一九三〇年)。
- ⑬ 梅原未治「吉利支丹遺物の研究」付録「日本発見銅劔銅鉾及銅鏃の聚成図」一九二六年。
- ⑭ 瀬之口伝九郎「豊後国成松村京ヶ尾出土の広鋒銅劔鉾に就て」(『考古学雑誌』第九卷第四号 一九一八年)。
- ⑮ 梅原未治・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下に於ける銅劔銅鉾調査報告」(『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二冊 一九二五年)。
- ⑯ 松岡文一「字和町の弥生式時代の文化」(『愛媛考古学』第六 一九六四年)。
- ⑰ 高橋健自「銅鉾銅劔の研究」一九二五年 四八ページ拓影。
- ⑱ 高橋健自前掲書 五二ページ拓影。
- ⑲ 中山平次郎「苓岐立石熊野神社の銅鉾」(『考古学雑誌』第一〇卷第八号 一九二〇年)。
- ⑳ 賀川光夫「新たに発見された東九州の銅鉾銅戈」(『考古学雑誌』第三九卷第二号 一九五三年)。
- ㉑ 註⑮に同じ。
- ㉒ 瀬之口伝九郎「大隅国出土の銅鉾に就きて」(『考古学雑誌』第八卷第二号 一九一七年)。
- ㉓ 防長新聞「上古の遺物銅鉾を発見す」(『考古学雑誌』第一四卷第一〇号、六五二頁 一九二四年) 長府博物館蔵拓本。
- ㉔・㉕ 註⑮に同じ。
- ㉖ 実測図によっては不明瞭なものもあり、ここではできるだけ自分で再検討したものに限った。
- ㉗ 水野清一・樋口隆康・岡崎 敬「対馬」(『東方考古学叢刊』乙種第

六冊 一九五三年)。

②③ 藤田亮策・梅原末治『朝鮮古文化綜覧』第一巻 一九四七年。

②④ 韓国国立博物館『一八・一五後蒐集・陳列品図鑑』一九六五年。

③⑤ 森貞次郎・乙益重隆・渡辺正氣「福岡県志賀島の弥生遺蹟」(『考古学雑誌』第四六巻第二号 一九六〇年)。

③① 高橋健自前掲書 図版第三十三。

③② 『対島』挿図43 他の銅矛鏢型についても同じ。

③③ 以下甕棺の形式編年については、森貞次郎「弥生時代における細形銅劍の流入について」(金岡丈夫博士古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』一九六八年)によった。

③④ 註②に同じ。

③⑤ 梅原末治『銅鐸の研究』一九二七年。所収中愛知県源祖鐸・兵庫県氣比第二号鐸等数例に鑄かけ・補刻がみられる。また愛知県伊奈第一号鐸等に平行銅劍と共通する鑄かけのさいの工夫がみられる。

③⑥ 用作……の用いてを、それを材料としての意ではなく、用ってという意味に解釈するのが普通ではあるが、ここでは、利用しての意に解

する。江上波夫「東亜における子安貝の流伝」(『アジア文化史研究』論考篇 一九六七年)二〇頁。

③⑦ 陳夢家「西周銅器断代」二(『考古学報』第十冊 一九五五年)によれば王伐蓋侯とし蓋は奄で、鄭玄の奄国は淮夷の北にあるとする意見を採用している。白川静「金文通釈」三(『白鶴美術館誌』第三輯)には楚と釈し楚とは釈しがたく、むしろ奄に賛意を表する。本論の釈は『書道全集』一によったが、なお疑問がのこる。

③⑧ 『書道全集』一 一九五四年によった。

③⑨ 註③に同じ。

④① 藤田亮策「倭銅の弁」(『朝鮮学論考』一九六三年)。

④② 『日本書紀』卷二九 天武天皇十年十月の条に新羅より朝貢があり、金・銀・錦絹等とともに銅鉄(銅)が献ぜられている。

朝鮮総督府中樞院『高麗以前の風俗関係資料提要』

追記 小論は京都大学文学部史学科昭和三十九年度卒業論文『銅矛——日・鮮における初期金属器文化の——様相——をもとにしたものである。また昭和四二年度文部省各個研究「殷周青銅利器の研究」の一部をなすものでもある。

(平安博物館)

actual effect, and it was Jitsugaku itself which had been called by Chu-hsi 朱熹.

In Chu-tzu's dualism universality always goes ahead of individuality, such as reason and spirit, or learning and morals. On the contrary, in Yang-ming's 陽明 theory individuality holds pantheistically the seat of monism, and "Liang-chih" 良知 in China is at once Chinese itself and particular in "spirit." Though the Shonan's theory even sometimes denied the Chu-tzū's, it could understand the European because it remained in the Chu-tzū's dualism. The object of this article is to demonstrate the form and genealogy of above-mentioned Shonan's idea.

Universality of the T'ang 唐 Dynasty

by

Zitsuzō Tamura

This article is a revised one of the public lecture in the meeting of the Shigaku Kenkyukai, or the Society of Historical Research, on November 2, 1967.

The T'ang 唐 dynasty is called the world empire in general, but the conception of these words is too uncertain. Then, we explain the universality of the T'ang dynasty from the four points; (1) its relation to the East-Asian world, (2) the Lü-ling 律令 system as one of the characteristics of the T'ang dynasty, (3) its relation to the North-Asian world, and (4) its universality through the Rebellion of An-shih 安史.

Genealogy and Development of the Culture in the Early Metallic Age in Korea and Japan

by

Takaichi Kondō

To trace the genealogy of bronze produced in the Yayoi 弥生 culture, spear-heads are treated in this article. In China in the latter half of the Yin 殷 dynasty appeared the spear-heads with ears at the socket, but in Chung-yüan 中原 and Ho-pê 河北 after the period of Si-chou 西周, the copper arms with no ears but a hole, and tz'u-pu 刺部 of Chia

戟 were prominent. On the other hand, since the end of the Ch'un-ts'in 春秋 in the Chiang-nan 江南 region around Hu-nan 湖南 appeared spear-heads with a nose or circular ear at the socket, showing special change without the formation of Chia 戟. In northern Korea where the casting of Bronze tools were commenced under the influence of the bronze culture of the Warring Period in Ho-pê Bronze arms were still used as a practical weapon, but in southern Korea signs of their change to ceremonial vessels are observed. Japanese bronze which began at the end of the first half of Yayoi 弥生 was cast by the south-Korean technicians hereafter, [shipping] bronze from southern Korea around Kyongju 慶州, and without making the most of the feature of casting they continued to produce the vessels with a one-sided change, which shows the regulating power of society in the Yayoi 弥生 era.

An Interpretation of the Development of the English Feudalism

by

Reigan Tomizawa

This article attempts to define that feudalism is a social custom based on the private contract between the lord and his vassal, and attempts to see the essence of feudalism in its individualism and its localism. In continent, these essences of feudalism developed into the concept of "corporate estate" distinct from the state. But in England, these essences developed, not into the concept of "an order" or "an estate", but into the concept of "the local community" or "the community of the realm".

Then, we proceed to the problem of relation of the feudal lordship and the kingship, and emphasize that both the feudal lordship and the kingship had the same origin in the lordship of kin-groups, and, entering to the feudal period, the English kingship developed as the supreme arbitrator over all the feudal lords, and proceeded to take the place of the overlord of all the local communities.

After all, this article tries to explain the relation between the feudal lordship and the kingship, from the standpoint of the growth of the concept of the community of the realm.